

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 : 暗号化の文学的手法と植民地的実存
—李箱解釈の一視座—

氏 名 : 金 三 淑

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は李箱の文学が暗号化されていると考え、このテーゼを証明することを目指している。本稿で用いた暗号化とは〈意味の疎通を拒否しているように見せかける仕掛け〉である。この暗号化の文学的手法は植民地的実存としての李箱を見据えることで明らかになると考える。暗号を用いた個人的・社会的状況を踏まえて研究を進めることで、暗号化が李箱にとってどれ程必然的手法だったのかが李箱の文学作品から見えて来るだろう。

李箱が生まれたのは1910年9月23日、既に植民地になっていた朝鮮であった。亡くなったのは1937年4月17日である。1910年8月29日に公布された韓日併合条約で、朝鮮は日本の植民地となり、1945年、敗戦による「大日本帝国」の瓦解により朝鮮は日本の植民地から解放される。まさしく、李箱は完全な朝鮮でもなければ、完全な日本でもない日本の植民地朝鮮の人なのである。

〈日本の植民地朝鮮〉という状況がもたらした衝撃的で異質な権力の集中と不平等、朝鮮伝統社会の亀裂と不安定などが個人の日常生活にまで直接・間接の影響を及ぼして、朝鮮は新奇で奇妙な社会になっていた。それは朝鮮人と日本人、朝鮮語と日本語の混在、朝鮮文化と日本近代文化の混在がもたらした状況であった。植民する側と植民される側という強制的で階級的な構造が朝鮮社会を支配しゆがめていた。さらに、近代文化といえども、朝鮮において輸入された近代文化はその多くが日本側の憧れた欧米近代文化のコピーであり、その中でも植民地に適用できるような植民地向きの近代文化であった。

反面、植民地近代文化といえども、植民地的状況を除いてみれば、人々には新鮮で新奇な近代性溢れる日常的な文化でもあった。蓄音機や映画、自動車や時計、電気や電話など近代的物質文明が次々と出現して、モダンボーイ・モダンガール、新女性など新しい部類の人々も登場した。前近代社会は近代社会に急激に変化し、近代に憧れを持つ人間が増えていたことは間違いない。

つまり、1930年代の朝鮮半島には朝鮮伝統社会と日本式近代社会と日本式植民地社会の特徴が雑然と混じり合った「難解」な社会が形成されており、朝鮮文化と植民地文化と近代文化とがぶつか

り合う状況であった。そのような混沌とした社会から一つの社会の特徴だけを分離して研究するならば、全体像は見えなくなるだろう。李箱の文学とそれが生まれた状況を正しく理解するためには、これら三つの社会的特徴を同時に見据える必要がある。

暗号化された李箱文学の表と裏にはどのような内容が書き込まれているのか、何故そこまで暗号化を用いる必要があったのか。本稿はこの疑問に答える形で個別作品の分析に努めた。

第1章は李箱文学における暗号化の手法を考えるきっかけとなった、初期日本語詩に含まれる記号をまとめて扱った。筆者はこれらの記号（「眞々5”」、「すてつき」、「ㄨ」、「△」・「俺」・「▽」）を暗号言語として捉え、その意味の解釈を中心に探ってみた。その過程で「難解」と言われている最初に発表された詩「異常ナ可逆反應」の全文解釈が可能になった。それによってまた、暗号化の手法が植民地の状況から必然的に生まれたものであることが検証された。暗号化の手法は植民地的実存の問題と結び付けて考えるべきではないかという筆者の立場がここで確立された。

第2章は短編小説「翼」の構造分析に努めた。何故ならば、第1章で考察した記号「△」・「俺」・「▽」から「翼」との作品構造上の関連の可能性が見えてきたためであった。また、日本語詩の「難解」性もあって、それらの構造を具体的に探るためには、小説を分析する必要性があった。

「翼」を読み解く鍵として、李箱が描いた2枚の挿絵とプロローグに注目し、暗号としての二重構造を探ってみた。それによってこの小説が、〈李箱と李箱の女の私小説的話〉、〈怠惰な男と娼婦の女の話〉という当時の小説にしばしば登場するような常套的モダニズム小説の表の話と植民地的実存の葛藤と希望を語る裏の話との表裏一体的構造物であることが見えてきた。

さらに、「翼」の「私」と「妻」との関係と詩語「△」・「俺」・「▽」との関連性を探り当てることによって、李箱の作品が実際の女性関係から生まれたという先行研究の通説を再考する必要性を示した。記号「△」・「俺」・「▽」が詩に現れたのは1931年で、李箱が一人目の女性、娼婦の錦紅と出会ったのは1933年である。つまり、時間軸上において「△」・「俺」・「▽」の構造のほうが先にある。したがって、李箱と三人の女性との関係は事実であるにしても、李箱の作品がその事実を踏まえて書かれたと見る見解は修正する必要があるとして、先行研究を論駁した。

第3章では短編小説「黿龜會豕」の叙述構造と人物造形の分析を試みた。「黿龜會豕」（1936. 6）と「翼」（1936. 9）は3か月の時間的間隔において創作されており、人物の性格面でも類似性を持つと先行研究で指摘されていたため、まずは「黿龜會豕」を分析する必要があると考えたからである。

分析において、李箱の視線が〈都市の散歩者〉としてではなく、〈都市の生産者〉として向かうところに注目し、小説「黿龜會豕」を植民地都市空間の「京城」と「仁川」、特に「仁川」という場所とそこに名指された記号化した地名を中心に読み解くことを試みた。それをとおして、「黿龜會豕」には植民地化に対する李箱の批判的な態度と、同時に近代化に対する憧れの二面がここでもやはり表裏一体化して描かれていると理解することが可能になった。

第4章では京城に開店したカフェに李箱が残した落書きとその同時期に創作された初期日本語詩「空腹——」を関連させて、詩の解釈に努めた。まず、日本語のふりがな表記法に注目し、李箱の暗号化の一つの方法を探ってみた。また、一緒に発表された「異常ナ可逆反應」と他の5編の詩との繋がりを重視し、初期日本語詩「空腹——」を李箱の現実認識と葛藤が如実に現れた詩として解釈した。

さらに、李箱の日本語詩の表記法について、これまで見落とされてきた1930年代当時の漢字カタカナ交じり文と漢字ひらがな交じり文の使い分けの状況に即して分析した。最後に、李箱にとって

日本語と朝鮮語とは何であったのか、という二重言語の問題についても端緒的な考察を試みた。

李箱文学には李箱が生きていた帝国主義の時代と、そこでもがきつつ生きる植民地的実存の分裂と葛藤の姿が現れていた。またそれと同時に、そのような状況のなかで「近代」を生きようとする詩人の希望と夢も描かれていた。これまでの考察によってはまだ開いていない部屋を今後さらに覗いてみる事ができれば、より具体的な李箱文学の姿が見えて来るだろう。

逸話・家族関係・病気・西欧文学などの観点からの先行研究も勿論重要ではあるが、様々な観点からの諸研究をただ単に足していくだけでは、李箱文学からにじみ出る深く到底した暗闇と痛みを理解することは出来ない。また、李箱文学の暗闇の中に、それでもなお何かほの明るく光っているものを説明することも出来ない。筆者が選んだ方法は、暗号化された李箱の文学を李箱の生きた状況と照合しつつ、その内的構造の細部に立ち入って解説するという、最もオーソドックスなものである。

本稿で行った研究は若い頃からの素朴な疑問に自分で答えを探す過程でまとまった一つの結晶である。しかし、李箱文学の全体像は見えてきたものの、具体的にはまだその一部が明らかになったに過ぎない。李箱文学に現れる家族関係の問題、結核という病気との関係、原典の確定の問題など、多くの問題がまだ残されている。

また、本稿は1930年代の日本語の表記法には触れたものの、同時期の朝鮮における朝鮮語の表記法、特に分かち書きの問題についてはまだ具体的に考察するには至らなかった。「翼」と「龜龜會豕」の間にも朝鮮語の表記法に差があり、分かち書きの度合いが違うため、今後詳しく検討する必要があると考えている。また、李箱の文学に造形されている女性像を明らかにするためには、多角的に探る必要があることについても、「翼」において影響を受けていたと先行研究で指摘のある横光利一の「眼に見えた風」と比較するところまでは考察を進めることができなかった。これも今後の課題として是非探ってみたいと考えている。西欧文学・日本文学との比較も李箱文学を理解するために欠かせない研究であると考えからである。さらに、本稿は暗号化の手法と植民地的実存の問題についてテキストを中心に考察してきたわけだが、植民地近代を生きていた李箱と当時の人間たちの現実状況をも含めてより深く読みこむまでにはいまだ至っていない。

ただし、本稿はあくまでも今後の研究のスタート地点をなすものである。これからは李箱文学の背景をなしたより実証的な資料を渉猟・検討しながら、緻密なテキスト分析を目指して、李箱文学に潜む植民地的実存の葛藤と希望と夢を、また、それが現在のわれわれに送っていたはずのメッセージを一つ一つ読み解いていきたい。